

斎宮跡の顕彰運動

昭和 54 年 (1979) 3 月 27 日、斎宮跡は国史跡に指定されました。大規模な宅地開発計画を受けて昭和 45 年 (1970) から開始された発掘調査によって「幻の宮」と呼ばれていた斎宮の様子が次第にわかりつつあります。しかし、地元では発掘調査以前から、斎宮・斎王のゆかりの地を大切にする活動（顕彰運動）が行われてきました。主な活動をご紹介します。

江戸時代の絵図には、斎王の森は「斎王の森」や「斎王の宮」、現在の竹神社は「斎宮旧地森」などと表現され、地元で特別な扱いを受けていた様子が分かります。

明治時代になると、地元の有力者が中心になって斎宮の復興運動を起こします。明治 36 年 (1903) には、斎宮村の村長であった櫛谷定治郎氏などを中心に「斎宮舊跡表彰会」が結成され、斎宮跡にゆかりのある場所に目印として標石が建てられました。

大正時代には、竹川村の鈴木直吉氏を中心に、花園の石碑が建てられました。昭和 10 年 (1935) には『斎宮村郷土誌』が発行され、地元住民に対し、斎宮村の歴史を伝える努力がなされました。こうした活動もあり、昭和 17 年 (1942) には斎宮跡が史跡指定される目までいきましたが、太平洋戦争の情勢が悪化し、実現しませんでした。

しかし、地域の人びとの活動があったからこそ、斎宮跡が遺跡として保存され、現在も受け継がれているといえます。地域の人びとの文化財を大切にする想いをこれからも受け継いでいきましょう。



江戸時代の絵図（個人蔵）に描かれた斎王の森と現在の竹神社周辺



顕彰運動で建てられた標石（上）
明治時代に顕彰運動に尽力した
地元の人びと（下）
大西源一氏撮影



斎王の森
國學院大学デジタルミュージアム
「大場磐雄博士写真資料」より
昭和 17 年 (1942) 撮影



くしや じやうぢやう
櫛谷定治郎



くわん かんろう
乾 寛郎



ながしま せつかう
永島雪江



きたの のぶひこ
北野信彦

キーワード：斎宮、斎王、顕彰運動